

はまなすの花

桜田 靖

はまなすの花は赤い、紅色の実をつける。大井 忠志は、はまなすの花咲く頃に痴呆の始まった母を連れて亡父の故地の函館へ旅をした。

潮かおる 北の浜辺の

砂山の かの浜薔薇（はまなす）よ

今年も 咲けるや

かつて函館に住んでいた夭折の歌人石川 啄木は、この街の未曾有の大火で地元の新聞記者の職を失い転居と転職を余儀なくされたが、ささやかながら幸せな生活のあった函館の砂浜を想い、後々にこの歌を詠んだものと伝えられる。

はまなすの赤い花を見るたびに、ほろ苦い思いを命の限り抱き続けるかと思うと、何だか辛い余生になりそうな大井 忠志は、五十才の誕生日を前にして尚更に憂鬱な気分になった。

(一)

平成一七年の夏季に、大井 忠志は、青森市で開催の全国英語教育専門学校連合会の総会に学校代表として出張を命じられた。総会とはいっても、弘前大学の教育学部教授 A 氏の「実践的な英語教育について」と題された講話を拝聴した後は懇親会だけで、全国の同様な学校から集った講師達との交流というか、情報交換の懇親の場に過ぎなかった。先日、彼は校長から内密に、学校が近い将来、早ければ来年にでも廃校となるとの情報を得ていた。同種の学校の乱

立と少子化が相俟って、親会社が学校の存続をあきらめたのであった。いわば、彼はリストラを控えた身であり、ご祝儀で青森観光を校長からプレゼントされたのも同然のことであった。出張日の後ろに有給休暇を三日間付け足して東京を後にしたのであった。総会の終了後、鉄道やバスを乗り継ぎ弘前市内の名所旧跡めぐりや太宰治ゆかりの斜陽館まで足を伸ばしたが、突然に下北半島の恐山に行きたい気持ちになった。

交通の便が良くなったので、恐山への旅程にはまだ十分な余裕があった。あらかじめ観光パンフレットで恐山の風景を見ていたので、さほど驚かなかったが、実際に辿り着いたらなるほど三途の川の手前まで来たような異様な景色を目の当たりして感得してしまった。賽の川原、血の池地獄、お地藏さん、死の一步手前まで来たような景色を見ていたら、自分はまだ確かこの世にいるのだよな、と一旦大きく息をしているのを確認して自分に言い聞かせるような雰囲気があつて、ひとりで可笑しくなった。

(二)

大井 忠志の父は千葉県の上野市で、煮豆を製造販売していた。父は婿養子同然であり、義父つまり大井 忠志の母方の祖父の家業を継いだのであった。戦前の祖父の代は、軍隊御用達の豆菓子業者として、大勢の使用人もいて店が繁盛し大いに富を築いていた。もちろん、折角貯め込んだ金銭は、わが国の敗戦のドサクサで紙切れ同然の価値でしかなくなった。

終戦後、父の代となつてからは原料の豆や砂糖が思うように手に入らず豆菓子の製造は止めて、惣菜の煮豆を売るようになっていた。煮豆の売れる日銭はたかが知れていた。ただ近所に大店の羊羹屋があり、「十勝羊羹」という売れ筋の羊羹に交ぜ込む小豆の煮豆の売上げで、一家七人、要するに祖父母、父母、この物語の主人公の忠志、それに二人の妹が何とか日々の糊口を凌げるという家庭の有様であった。忠志は、父親に似て白皙の端正なマスクをしていたが、眉毛だけは異様に太く長かった。これは、父の先祖が代々東北地方

にいたと聞いていたので、蝦夷の血が入っているからだ、と勝手に決め込んでいた。性格は総じて大人しかったが、言い出したら一歩も後に引かない依怙地さも持ち合わせていた。

彼が中学三年生になった頃、ちよつとした家庭問題が起こった。祖父が、忠志は高校なんかに行く必要はない、このまま煮豆の職人になれ、と言ったからである。

大正の末期に函館で生まれた父は、末っ子の気ままさで一人上京し建築専門学校を修了したが、先の世界大戦のせいで上級の学校に進学できず、やむを得ず取得した技術を生かすことのできる陸軍軍属への道を選び、命に応じてトーチカや塹壕（ざんごう）の設計施工をしていた。その拳句に千葉県下の連隊に在籍していた二十歳の時に仲介する世話好きがいて、同い年の母と見合いし煮豆屋の婿養子になった。

戦時中は軍隊に残らざるを得ず、軍命により旧ソ連と旧満州の国境近くの集落に配備されたが、日本の敗色が濃くなった頃に本土防衛ということで引揚命令を受け、今度は千葉県の九十九里浜で敵の上陸に備えて塹壕掘りの軍務に従事することになった。忠志は、父から終戦の年の東京大空襲で西の空が血のように真っ赤だったと聞いたことを覚えている。その年の夏、日本の敗戦で軍隊は解散し、父はN市の母と祖父母の元に帰って来たのであった。父は、手馴れない豆を煮て売るといふ商売人の道を歩まざるを得なかったのである。

父には父なりの意地があった。せめて子供には世間並みの学問を身につけさせるべきだと考えていたのである。父は反発した。今の時代、職人でも高校位は出るのが当たり前と言いつ張ったのである。

しだいに祖父と父は口を利かなくなり、たまに祖父が煮豆の商売に口を挟むと「永年やってきたから何でも知っている。黙ってみている。」と乱暴な口調で言い返し二人の仲は自然と断絶していった。母は実父と夫の板ばさみで、触らぬ神に祟りなしといった風情で当り障りなく家庭を切り盛りしていた。

当の本人である忠志は悩んだ。実の娘が、結婚の十年後にしてようやく生んだ初孫の誉れで、小さい時から可愛がってくれた祖父から「父ちゃんは商売が下手だ。商人に向いてなかった。おまえは立派な商売人になれ。この畑もある広い家屋敷は、俺が一身で裸一貫から築いたものだ。商売人のコツを一から仕込んでやる。昔のように豆菓子を作って千葉の名物としてデパートやスーパーで売れば良いのだ。」と言われ、すっかりその気になった。

しかし、その翌日、父から「忠志、よく聞け。おまえは学校の成績が良いじゃないか。人生は一度しかないんだぞ。志を立てて勉強に励め。学費は父ちゃんが工面してやる。世の中で人の上に立つ人間を目指せ。煮た豆を売ってペコペコして一生を過ごしたいのか？」と説得されると、又気持ちが変わって高校へ進学したいと思った。

しかし、国がまだ経済的に自立していない貧しい時期に祖父がたまに珍しい舶来のお菓子を手に入れたら、皆喉から手が出るほどに欲しいのに「これは忠志に食わせるものだ。」と家族や親戚の人の前で公言し、ほかの誰にも分け与えなかったなどのエピソードを、後年に祖母から繰り返し聞かされたりしたことなどを思うと、心は千々に乱れた。結局、中学校を卒業したら昼間は家業の煮豆屋を手伝い、夕方から最寄りの高校の定時制に通い勉強をした。この折衷策は忠志の判断で決めたことで祖父も父も異論はなかった。しかし、母からは陰で「俺の言うことを聞かなかった。職人が学問を身につけても何の役にも立たないどころか、返って商売人として大成するのに邪魔になることが分かっている。」と祖父の不満の思いをそつと伝えられ、何とも複雑な気持ちで夜学へ通った。

(三)

大井 忠志が定時制の高校三年生、秋の中頃の日曜日だった。天が透き通るほど青く高い、雲ひとつない午前中だった。

「忠志、秋晴れで気持ち良い日だ。散歩でもしないか。」と祖父から誘われた。離れの小さな工場で黙々と豆を煮ていた父は出かける二人を横目でチラッと見送っただけであった。当時のN市の市街は

横道から二十分も歩けば、田畑や雑木林が広がっていた。白い陽光の下、稲穂が黄色く頭を垂れ、畑では野菜の葉が青く輝いてパッチワークのような景色が静かであった。

「忠志、爺ちゃんは、もう体がきついよ。婆ちゃんと生まれた里に帰ろうと思うよ。」

祖父の郷は、千葉県の外房にある飯岡、九十九里浜や小説「天保水滸伝」の飯岡の助五郎親分で著名な地である。

「今住んでいる家屋敷は、みんなこの爺ちゃんの名義なことを知っているな！」と祖父は念を押す。隣の「富士屋旅館」に家も土地も売り飛ばすと言う。富士屋の主も渡りに舟で、この売買に乗り気だそう。昔からある商人宿だが、このところの日本の経済成長のせいか、ビジネスホテルに建て替えても十分にやっつけていけると見込んでいると言う。そのためには、隣の煮豆屋の広い土地は喉から手が出るほど欲しいに決まっていた。

「爺ちゃん、夜間で良いから大学まで行きたいんだよ。それまで待つてよ。」と忠志は重い口を開いた。

「大学？何を勉強するのだ。」

「英語を勉強し、教員になりたいんだ。」

「チエツ、毛唐の言葉を話したいのか。おまえが商売を継がない気なら、家も土地も富士屋に売って、その金で飯岡に家を建て、残りの金で婆さんと暮らすからな。父ちゃんと母ちゃんの面倒は頼んだぞ！」と怒気を含んで祖父は吐き出すように言った。そして、ひとりで家の方向へすたこらと歩を進めた。

二人の妹は、まだ中学校生と小学生だし、畑中にひとり取り残された忠志は、身内を宿無しにするのかと、祖父母をはじめて恨めしく感じた。

(四)

結局すったもんだの末、家屋も土地も隣の旅館に売却され、祖母は生まれ故郷の飯岡へ去った。町会で仲裁に入ってくれた人の世話で、今後五年間は家賃を富士屋に払って商売を続ける、その後は

家を明け渡して出るといふ条件で当面のかたはついた。五年間ということは、忠志が大学を出るまでという意味であった。祖父は実の娘の母も飯岡へ連れて行きたい素振りだったと後で分かった。「父ちゃんと離婚しろ、そうしたらおまえとも飯岡で暮らせるぞ。」と祖父からそつと囁かれた、と母は打ち明けた。忠志は、両親は永年仲睦まじく連れ添って苦楽を共にし、三人の子を育てている最中に、何とも非現実的な話をするものだと思腹が立った。母も、それはできないと即座に断ったそうである。

何らこれといった趣味もなく一日中豆を煮て、夕食時に日本酒で晩酌をやるのだけが唯一の楽しみだった父は、祖父母が飯岡へ去ったあと、急に酒量が増え、量はコップ一杯か二杯程度だが朝酒も昼酒もするようになった。そんなある日、気分が悪いと言って寝込んだが、すぐに大量の血を吐いた。救急車を呼び病院に運ばれたが、医師の診断は、末期の肝硬変ということで、余命は幾許もないような告知であった。案の定、父は吐血を繰り返し、それから二週間後に世を去った。享年四八才であった。

死の前日の夕方のことだった。暑い日だったので、忠志が病院のベッドのそばにいて眠っている父に団扇の風を当てていたら、突然目を覚まし、消え入るようなかほそい声で「忠志、住む家を何とかしてくれよ。母ちゃん達を頼んだよ。一度でいいから母ちゃんを連れて函館に行ってみたかったよ。」と言って、また目を瞑った。ほんの一瞬、小康状態になったのであるうか。その後は昏々と眠り、明け方に大吐血をした。当直の医師の緊急措置で容態は一旦安定した。しかし、その日の昼頃、病院囑託の看病の老婦人が、患者が異様にあくびをするのを職業柄の勘で悟り、ナースセンターに連絡した直後に急に口を大きく開けて悶え苦しみ出した。担当の医師が到着した時には絶命していた。忠志は、看病の老婦人から「お兄さん、お父さんは水を飲みたい、飲みたい、とあんなに我慢していたのだから、早く。」と気の毒そうな目でコップに末期の水を差し出してもらった。筆先に水をたっぷりと湿らせ、父の乾いた唇を濡らすと、

忠志の目頭も潤んできた。妹達の号泣する声を聞きながら、これからどうなるのだろうか、とぼんやり考えるしかなかった。

(五)

通夜の弔問客も去った晩遅く、忠志は葬祭場の一室で、母が一心不乱に手紙を書いている後ろ姿を見た。何を書いているのか、と聞く気にはならなかった。さりげなく「何しているの。」と声をかけると、「お父さんに手紙を書いているの。」と答えた。明日、父の柩に入れるのだろうかと思った。しかし、母子の間柄とはいえ、何を書いたのか手紙の内容を聞くのは憚られた。一体、何が書かれているのである。多感な年頃だった忠志は、一計を案じた。どうせ、死んでしまった父が読めるはずもなく、遺骸と共に焼けて煙になっってしまうだけだと思ったからである。通夜の明け方、先に一眠りして来た忠志は、「今日は告別式で人も来て色々大変だから、一眠りだけでもして来たら。」と母を妹達が寝ている部屋へ半ば追いつた。父の遺体の合掌を組んだ手の下には、昨晚母が認めていた手紙が入った封筒が父の名「大井 正夫様」とだけ宛名書きされ差し込まれていた。忠志は葬祭場から五分も離れていない自宅に駆け戻ると、同様の封筒を見つけ、すぐに亡父のそばにとって返し、母の筆跡を真似て父の名前を書いて、その空の封筒と母が書いた手紙を差し替えた。

葬儀や飯岡にある母の菩提寺の墓に納骨が滞りなく終えても、忠志は封筒を開けて母が書いた手紙を読む気持ちにはなれなかった。父母は初老に近い年齢になってからも、一つの布団に枕を並べて寝るほど夫婦仲が良かった。愛する夫と肉親の板ばさみの身で、生前は語ることでできなかった思いのたけを綴ってあるのかも知れない。それを内密で目にするには、罪悪感に塗れるだけでなく、一つのちよつとした恐怖であり、純真な若者にはとてもできることではなかった。その封書の手紙は、忠志の勉強机の奥深く、さらに折りたたんで別の大きな封筒に入れて仕舞い込まれた。

忠志は、昼間は母と一緒に煮豆屋の商売をしながら、定時制の高

校を卒業し、千葉市にある英会話専門学校の夜間部に通学した。そこは二年制で修了であり、成績が良かったので、卒業時に学校の推薦で東京の中央区にある大手のオーディオメーカーが直営のラングエッジラボラトリースクール（語学専門学校）に英語教育の助手として雇用された。

家屋敷の買収先の富士屋旅館は、祖父母が去るや否や、先ず店舗と工場の裏にあつた二百平米程度の畑地に加え、松や椿の古木に小さな池のある庭までブルドーザーなどを入れて更地にし、あからさまな圧力をかけてきた。旅館の主は、何かと世間話をしにふらりと店先にきては、早く家を明け渡せばその分割増で明渡し賃を支払ってやるからと、傲慢に言つた。約束の五年間に、まだ二年間あつたが、忠志の就職も決まつたので、鉄筋五階建ての市営アパートの申し込みをして早めに出ることにした。妹達も小さいながらも気を利かせて、中学校を卒業したら、社員寮があり高等教育も施してくれる大手の家電メーカーの女子職工になると心を決めていた。

（六）

大井 忠志は、恐山のこの世ならぬ光景を目にしているうちに、イタコという巫女の口寄せなるものを気まぐれに体験してみたくなつた。父の霊を降ろしてもらいたくなつた。やはり、心の隅に母の父宛の手紙を抜き取つた罪悪感を棲息させていたのであろう。

イタコの小屋というか、お堂はあちらこちらに見えた。どこでも良かった。その気になつた時に、一番近くに見えた粗末なお堂の暗い室内へ入つた。七十才位に見える老女が数珠を繰りながら坐つていた。唇が口紅をさしているのか、やけに紅いのが目立つた。イタコは東北訛りの忠志には聞き取りづらい声で話しかけてきた。

「どちらから来たのかな？」

「千葉県のN市です。」

「今日は誰を呼びたいんか？」

「父です。」

「本名は？」

「大井 正夫です。」

「幾つで亡くなっただんか？」

「確か四八才でした。」

「あなたは何才かな？」

「満で五四才になりました。」

「ほかに兄弟は？」

「妹が二人います。」

「結婚はしているだろうね。」

「女房と子供が二人います。」

「お母さんは元気にしているかね。」

「はい、元気です。葬式の時にお棺の中に父への手紙を入れました。」と忠志は、故意に悪戯心から聞かれもしなかったことを付け足した。もしイタコの口から空っぽだった手紙の中味が語られたらインチキの証拠で話のネタになると思ったからである。

イタコは、数珠を繰りながらしきりに喉に痰でもひっかかっているようにゲヘツと咳きをしていたが、やがて、憑依状態になったのか、おもむろに荘重な口調で紅い唇を震わせるように語りを始めた。「今日は、遠いところから来てくれて有難う。こちらで元気になっているから安心してくれ。おまえ達のことはいつも気にしているぞ。こちらは時間の経つのが遅いから、来てからまだ一日も過ぎてないぞ。母ちゃんが早く来るのを待っている。今日はよく参ってくれたな。では達者でな。」

ざっと、こんな風に当たり触りのないことを一方的に告げられ、父の霊は昇って行ったということであろう。イタコのいるお堂を出たら、風向きのせいかわ硫黄の匂いが鼻をついた。石仏のそばでカラスガ何かを啄ばんでいた。父の霊がイタコの紅い唇で喋った「こちらではまだ一日も経っていない。」というのは、人間世界の五十年は天界の一日に相当する、という仏法の思想かなと思った。すでに父が死去してから三六年の歳月が過ぎていた。

それにしても忠志は、久しぶりに父を想い、今わの際に、母と生

まれ故郷の函館に旅行したかった、と言ったことを思い出した。そして、八四才になる母親をまだ一度も函館に連れて行っていないし、自分もまた一度も実父の故郷を訪ねたことがないことに気がついた。父は八人兄弟姉妹の末っ子であり、葬儀に北海道から遙々とやって来た兄や姉達は、すでに鬼籍に入ってしまった。従兄弟達など縁者は函館にいらるであろうが、互いに音信はしていない。

忠志は、思い立ったが吉日とばかり、この夏の間にも夏季休暇を使って母と函館に行ってみようと思った。

(七)

八三才になる母は物忘れがひどかったけど四、五年前までは元気に外出していた。しかし、近年は市営アパートの一室にこもって、一日中テレビをぼんやり見ながらうつらうつらと過ごすことが多くなっていた。忠志の息子達も大人になったら祖母をかまうこともなくなり、妻も変則な病院の受付のパート勤務で疲れ気味で、母の相手をするのも必要最小限度といった様子であった。近頃の母は、心なしか笑うことも少なく口数も減り、しだいに無表情になっていた。年なりに呆けているのだと思つて放つておいた。

早速、忠志はすでに嫁いで主婦になっている二人の妹に「母さんを親父の故郷の函館に連れて行こうと思うのだが、一緒に行かないか。」とそれぞれ電話してみたが、「一人とも異口同音のごとくに、「それはまた、今頃どういう風の吹き回しかしら。」と冷やかすように笑うだけであった。確かに今更のように親孝行の真似事をしているようで、偽善的な自虐の心地にはなつた。出張から帰つたすぐに、虚ろな目でテレビを見ている母に「来月、函館に行こうね。」と話しかけたら、忠志に視線を合わせるでもなく、表情のない顔でこっくりとうなずいた。

母の足どりは、ややおぼつかないが、それでも杖をつけば大丈夫であった。函館まで、青函トンネルを通る夜行寝台列車が楽かと思つたが、時間的なことを考えると、合理的な羽田空港からの空の旅にした。

北の大地とはいえ、八月の函館は東京と変わらぬ暑さであった。忠志が子供の昔のことだが、父に連れられて映画館に行ったら、最初にニユースがあり、函館の駅前の映像がスクリーンに映し出された。父は思わず「函館の駅前は東京の銀座みたいになぎやかだぞ。」と話しかけてきたのを今も忘れない。望郷の念が強かったのである。

父の生地「函館市松風町無番地」は戸籍謄本に記載されていたので知っていた。何となく海辺の通りを予想していたら、函館駅前の一帯の繁華街が松風町であり、ちよつとびっくりした。埋め立てとかで松林などのある風景が一変したのかも知れない、と忠志は思った。父が生まれ育った往時は、青函連絡船の港のある北海道の玄関口でもあり、北方貿易の拠点として賑わって、街は拡張に拡張を重ねていったのであろう。

今、目の前にある松風町の光景は、低層の屋並の商店街で、何の変哲もなく人影のまばらな寂れた地方都市の姿であった。松風町無番地とは、どのあたりか市役所に行ったら教えてもらえるかも知れなかったが、今更、父の産土の地の痕跡を探しまわる感懐はなく、暑さのせいもありそんな気にもならなかった。母も元気がなく、朝から「食べたくない。」と水を一杯だけ飲んだきり黙ってしまった。しかし、折角やって来たのだから、亡父の故地を観光しようと思った。足元の若干おぼつかない母のため、タクシーで回ることにした。名所巡りコースはタクシーの運転手に任せた。最初に五稜郭、ヨーロッパの城を模した菱形の城址公園であった。母が何にも嬉しそうでなかったの、そそくさとタクシーに戻り、女子の修道院として有名なトラピスチヌ修道院へと向かった。美しい白樺林のそばに修道院の門はあった。瀟洒な修道院の建物を眺めながら、清浄な庭の木陰のベンチで憩いを取り、昼食代わりにここの修道院特製のクッキーを母子で齧った。

母の様子は相変わらずで「早くお家へ帰ろうよ。」と言う。やっと、だいぶ痴呆が進んでしまっていたのだな、と忠志は気がついた。

タクシーの運転手は函館空港に近い牧場のある大平原を車窓に流しながら、次は、土方歳三の終焉の地の記念碑に行くという。

大きな石碑の辺りは清潔に手入れされ夏花が静かに咲いていた。土方歳三のファンは結構多いようだ、と親切そうな中年の運転手は説明した。母は相変わらずで、心ここにあらずといった風情であった。忠志は、函館山の下にホテルを予約していたので、ロープウェイの駅まで行ってくれるように運転手に頼んだ。「函館山は夜景が一番で、昼間登ってもつまらないですよ。」と彼は答えたが、忠志は、母に少しも喜色が見えないので、函館山に登るかどうかは駅に着いた時点の母の様子で決めることにした。

(八)

「お家に帰りたい。」と母は言う。気のせいかな語尾がはっきりと聞こえなかった。ロープウェイに乗るのはあきらめて、坂を海岸方向に下りホテルに向かった。とある広い屋敷の垣根に赤いはまなすの花が咲いていた。花の大半は紅い果実になっていた。突然、母は垣根のそばにしゃがみこんだ。母の顔の先にはまなすの花があった。じつと花を見つめているようであった。忠志もそばに立ちつくし、「それがはまなすの花だよ。」と言って、母が好きなだけ花を眺めているのを待つことにした。

その家の門から、「どうかなさったのですか？」と中年の色白の婦人が出て来た。見ると、それぞれの腕に小さな猫とウサギを抱いている。「いえ、別に、猫とウサギを飼っているのですか？」と忠志は返事をした。

「そうですね。とつても仲が良くて、可愛いわよ。」と愛しそうに、双方に頬ずりをした。

忠志の実家は、煮豆屋だった商売柄、ネズミを追い払うために、猫は切らさず飼っていた。母は大の猫好きであったから、「アラ、猫ちゃん！」と普通だったら駆け寄るのだが、全く無視してはまなすの花を愛でている様子であった。忠志が「母さん、猫だよ。」と声をかけた時であった。母は崩れるように前へ倒れこんだ。唇は震

えるが、声音は出ない。

「まあ、大変！」くだんの婦人は救急車を呼ぶと屋敷の中へ駆け込んだ。

函館の駅に近い救急病院の一室で、忠志はあせりまくった。とりあえず、埼玉と神奈川の妹二人に連絡をしたら、すぐに準備して駆けつけると返事をくれた。それからが大変だった。電話帳をめくり、「大井」という姓を見つけて片っ端から「大井 正夫」という千葉で三十年以上前に亡くなった者に覚えがありませんか？」と丁寧に尋ねた。函館も大きな都市であり大井という姓は多く、頭から十五番目位までは、電話口に誰も出なかったり、出てもまるで怪電話のように、知りませんと一方的に切られた。しかし、世の中は捨てたものではないと忠志は思った。そのうちに、「大井 正夫さんというのは、亡くなった父の弟さんのように思えます。千葉県に住んでいたと聞いています。」という人にぶつかつた。事情を縷々説明したら「他にも従兄弟達が市内にいますから、待っていて下さい。」と電話を切った。地獄で仏とは、このようなことかと、遠い旅先で忠志は胸を撫で下ろした。

夜になって、従兄弟達とその家族六人が、病院に駆けつけたが、その時には母は冷たくなっていった。病院側から「脳溢血です。」と死因を告げられた。忠志は、函館の親類縁者に日頃の無沙汰を詫びた。翌日、妹達が家族を連れてやって来て、「この暑い時期に何で母と旅行したのか？」と詰問しながら泣いた。忠志は、何も弁解せず「済まなかった。」とだけ詫びるしかなかったが、終いには母も十分に長生きしたから、と妹達も納得した様子であった。函館の火葬場に併設の斎場で僧侶から枕経をあげてもらい母を荼毘にすると、世話になった従兄弟達と別れて千葉へ帰った。千葉のN市の市営アパートの集会室で、身内と町会の役員だけで密葬をし、母の遺骨は飯岡にある実家の先祖代々の墓に埋葬した。そこには父も眠り、とうに祖父母も眠っている。墓前で、「父さんと母さんは大丈夫だけど、爺ちゃんや婆ちゃん達とはうまくやっていけるかしら。」と

上の妹がいうと忠志は、「今度、恐山に行つてイタコの口から母の靈に聞いてみな。」と答え、場所柄もわきまえず、皆で不謹慎に哄笑した。

すぐに母の初盆が来た。その昔、母が亡父宛に書いた手紙を机の引き出しの奥に仕舞い込んでいたのを思い出した忠志は、ひとり盆の終わりに市営アパートのそばの小公園で麻幹（おがら）の送り火を焚いたが、その際にその煙に紛れてその手紙を、封を切らずに焼こうと思つた。もう今更手紙の中味には興味はなかつた。忠志は、別段信心深い質ではなかつたが、お盆で帰つて来た母の靈魂が、昔日に自らが書いた手紙を持って靈界の父に届けてくれる、と信じようと思つた。手紙に火が移つたその時だけ、炎がぼつと火の魂のように燃え上がった。

はまなすの花は赤い、紅色の実は美味でジャムにもなる。しかし、大井 忠志は、恐山のイタコの紅い唇の色を思い出すと毒のようである。ほろ苦くも心辛い気持ちになつた。

終